

雨 飾 山 の 植 物 の 記 録 *

寺 島 虎 男

雨飾山(妙高火山帯)は標高1,963mで北安曇郡と新潟県西頸城郡との郡境の名峰であり、白馬岳に追従する程の植物の一大豊庫である。附近一帯の広域が上信越高原国立公園に指定されている。東方には乙見山峠より北に数えて薬師岳(1802m)天狗原山(2197m)金山(2080m)火打山(2462m)焼山(2400m活火山)妙高山(2446m)の数座が連峰をなし、天狗原山がその主峰として諸山に君臨している。頸城アルプスとも呼ばれ、以前から冬季スキー踏破の場所として相当知られてきた所でもある。筆者は昭和2年の夏故小泉秀雄氏に同行して、天狗原山から妙高山に至るまでの縦走をしたことがあるが、高山植物や裏日本系植物の豊産と群落の規模の大なる事に驚異の眼を見張った事であった。雨飾山はその妙高火山帯の一支脈中に聳えている。

雨飾山は、峨々たる岩山であり、中腹下に広大な雪渓を控えて容易に人を寄せつけず、ただ僅かの盆栽業者が頂上を極め、岩壁をよじて主としてミヤマビャクシン俗に真白、白樹と称する低木を採取したり、イワタケを岩上より剥ぎ取ったりしていた。またヨブスマソウ・ミミコウモリ・クサソテツ・ウド・タラの芽等の山菜取りに入山してただけだった。雨飾山と呼ばれるのは信仰的な面からで、干魃に際して村人が雨乞いの為登ったところから雨を賑やわすと云う意味からだといわれる。しかし昭和43年に小谷村の観光開発により大海川の左側山腹に沿って登山道が完成し、今は一般の登山も容易になった。かえりみれば昭和11年夏、松本理科同好会員四氏と共に雨飾山を踏破し植物調査をしたが、この際は小谷温泉を根拠地として、温泉裏の明才用水取入口を経て大海川に下り、川の端を上行し、時々右岸また左岸を何回も渡渉しつつ、アラスグ沢に出て、原始的な

谷の山壁、急坂の岩壁をよじて雪渓を登り、約7時間を要して漸く頂上に達した。当時の眼に入った主な植物を挙げると、シラネアオイ・キヨシミウツボ・オオバヨツバムグラ・シナノナデシコ・フジシダ・タカネナデシコ・タテヤマウツボ・イワシモツケ・オニシオガマ・アイヌガラシ(恐らくオクヤマガラシ)・ミヤママンネングサ・アズマシロガネソウ・オオバキスミレ・コマガタケスグリ・トガクシタイゲキ・エゾノグツナイフウロ・ハクサンオオバコ・ヒメシャジン・カンチコウゾリナ・ユキワリソウ・シロバナヒメシャジン・ミヤマウイキョウ・チョウジコメツツジ・ハクサンイチゲ・ハクサンコザクラ・コイワカガミ・ミヤマクワガタ・ヒモカヅラ・ハイマツ・ミヤマハンノキのように高山植物や北方系要素が多い。

* 長野県科学振興会昭和44年度助成金による。

昭和44年6月17～18の両日小谷温泉熱泉荘を根拠としてオ一日は午後より乙見山峠(標高890m)までの調査をした。一行は清水建美、清沢晴親、奥原弘人、土田勝義、寺島虎男であった。道中採集に時間を費した為止むなく途中から引返してきた。このあたりブナ帯の林下、山野、路傍に見出した特記植物は、シロバナタニウツギ・エゾアジサイ・オクヤマガラシ・ミヤマカワラハンノキ・マルバマンサク・カラスツキミ・ヒメアオキ・カントウマユミ・クロヅル・ナニワズ・エゾユズリハ・ケナシヤブデマリ・ハイイヌガヤ・コンノカンアオイ等、多産の種類はオオイトドリ・テンニンソウ・ナンブアザミ・タニウツギ等。特にコンノカンアオイは松尾川の上流道路を横切り、一つの沢を上った林下に群落を発見したが、暗赤紫色の大形の花をもち、異彩を放っていた。

オ二日目は望月精一氏を加え目指す雨飾山の探究に向う。午前6時温泉を後に大海川の左側登山道に入り、鎌ヶ池に到る車道と別れて溪谷に沿った山道を登る。登山口の近くにかなり広い湿地帯があり、川沿いにサワグルミの純林叢あり、ミズバショウの生育範囲も広い。水辺湿地にはツルキツネノボタン、オオタチツボスミレ・リウキンカの群落あり、黄に白に花盛りであった。オニシオガマも僅かではあるが眼にとまった。ツルキツネノボタンは、青森県および岩手県にのみ分布が知られていたが、今回の調査で、隔離分布することが判明した。標本の1点は京都大学の標本庫に寄贈した。ブナ帯林下及び登山道はたに見出した種類の主なるものを挙げると、ムラサキヤシオ・タムシバ・サイゴクミツバツツジ・ケハクサンシャクナゲ・タニウツギ・ムシカリ等の低木、下草にはサンカヨウ・ツバメオモト・シラネアオイ・ウスユキソウ・オオカニコウモリ・オクモミジハグマ・ミヤマカタバミ等。約1500m、大海川上流に大雪溪あり、その手前の道路はたに一群のアズマシログネソウと思われる可れんな草本をみつけた。葉状においては余り大きな差はないがアズマシログネソウの花色淡黄緑なのに引かえ淡黄色の弁の基部に暗赤色の部分のあるのに疑問をもち、2株程を持参して培養しているうちに花の渦む頃走出枝を写真で見るように四方に出し、その先端に葉を若干附けるのをみて、サンインシロカネソウだと分った。分布が福井県より島根県に至る山陰地方となっている所からこれも隔離分布の一種として信濃では最初のものと思われる。これは、裏日本要素の一つである。雪溪の山ぎわ辺と見当つけて瀕りと捜してみたトガクシヨウマは残念ながら発見することができなかった。大雪溪を渡って急坂な山壁に沿った山道を登る。これより上方はシラビソ〜ブナ帯の林下で、オオバキスミレ・ハクサンチドリが特に多く、ギョウジャニンニクやカタクリの花盛りで群落をなして雪溪のつきるあたりまで続いているのに驚いた。山菜のヨブスマソウやミミコウモリも次々に多産となる。いよいよ頂上より凡そ180m低い広々とした高原台地に出ると乾性、中性、湿性の高山植物の多種が出現して探究に忙しくなったが、特にユキウリソウとキバナアツモリソウが草原礫地に一きわ目立って花の全盛なのに喜ぶことしきり、前面の山壁にはシラネアオイが山を埋める程の白一面の美観は筆舌の尽せるところではなかった。愈々急峻な山道

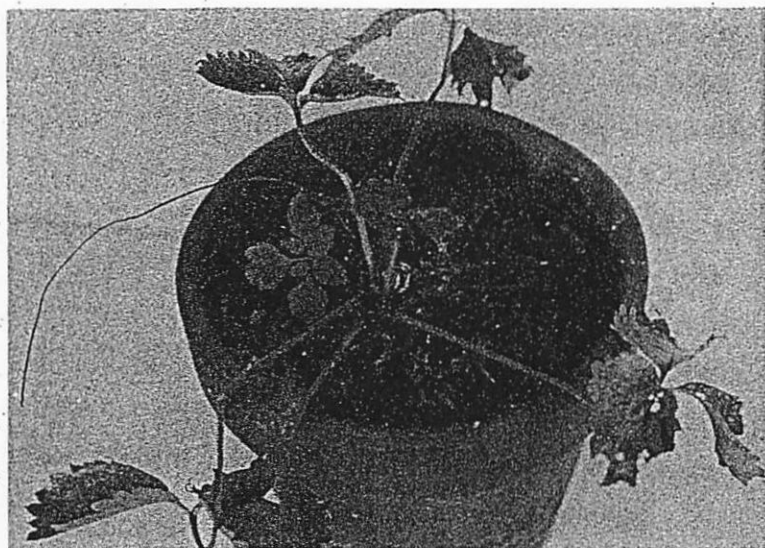


写真 雨飾山の雪溪わきのサイインシロカネソウ
(豊科町で栽培)

を頂上目指して登ったが、チシマザクラが開花中であり、ミヤマビャクシン・ハイマツ等も多少芽
われ男を鼓して頂上に到達したのが午後2時半頃、時間がなかった為珍種の着生する危険な岩壁の
ぞきは断念して、心残りではしたが、急ぎ帰路に着く。ミヤママンネングサ・イワベンケイ・ヒメイ
ワショウブ・ヒメシャジン等が岩板に着生しているのに気付いた。

〔附 記〕 今回の調査ならびに平林らの報告(※)で確認された雨飾山周辺の裏日本要素は次の
通りである。

ミヤマカワラハンノキ・ミヤマイラクサ・コシノカンアオイ・オオイタドリ・ケイタドリ・タ
シバ・シラネアオイ・サンインシロカネソウ・オオバクロモジ・マルバマンサク・オクチョウ
ザクラ※・コシジシモツケソウ※・エゾユズリハ・トガクシタイゲキ・クロヅル・ヒメモチ・ニ
キツギ・テングスミレ・オオタチツボスミレ・スミレサイシン・ヒメアオキ・オオイワカガミ
サイゴクミツバツツジ・ムラサキヤジロ・イワナジ・タテヤマウツボ・コシジタビラコ※・オ
ソオガマ・タニウツギ・シロバナタニウツギ・ケナツヤブデマリ・オオカニコウモリ・ヒトツバ
モギ・オニアザミ・タチアザミ・ノッポロガンクビソウ※・チシマザサ・ユキクラスカボ※・
ズバショウ・キヌガサソウ・

参 考 文 献

平林国男・中村武久・高橋秀男(1969) 白馬、後立山、東方山のフロラ 神奈川県立博物館研究報告 1巻3号(自然科学)

黒 倉 山 の 調 査 報 告^{*}

中 山 冽

本会の研究テーマである裏日本要素植物の究明のため、1968年8月新潟県境の関田山脈、黒倉山(1288.8m)および野々海周辺(1100m)において合宿調査をおこなった。参加者は、林一六・伊藤静夫・梶幹夫・清沢晴親・中山冽・太田秀夫・清水建美・白井幸長・土田勝義の9名であった。

I 日 程 と 経 過

8月7日 晴 戸狩(五荷)民宿、中沢朝夫氏宅に夕刻5時頃までに全員が集合。早くも附近へ採集に出かける。

夕食は本場の野沢菜の漬物と心のこもった料理にビールを一杯、日中の暑さを吹きとばす。食後、具体的な調査法の検討に時間を忘れた。

8月8日 晴 6時起床。快晴の空の下7時10分のバスにて温井まで乗車。採集しながら黒倉山へと向かう。部落を抜けると早くも調査目的のミヤマカワラハンノキの群落をみ、水田の水口附近にコシジモツケソウの群落も発見。比較的平坦な道より次々に山にかかる頃、一つの温水ため池をみる。標高750mあたりよりブナを主体とする森林となり、林内にユキツバキを発見する。それまで細々とつながっていた山道は次々にその姿をかくし、林内の蒸し暑さに一休みしたあとは完全に見失ってしまった。

それでもブナ林の中に目的のユキツバキの群落が見事に広がるのに気をとられ、調査を続行しながら上へ上へと藪をこぎ、谷をわたり斜面をよじた。下見をしておけばと幹事としての責任を感じる。林内では見通しもきかず方角も不明なのでより高きをめざして突進するより仕方なかった。

^{*} 長野県科学振興会昭和43年度助成金による。